

## 第 25 回宮坂英弑記念尖石縄文文化賞 受賞者 小川 忠博氏

尖石縄文文化賞条例にもとづく同賞選考委員会は、今井敦茅野市長の諮問を受け、8月31日に開催された。今回、選考・審査の対象となったのは、個人計6人である。

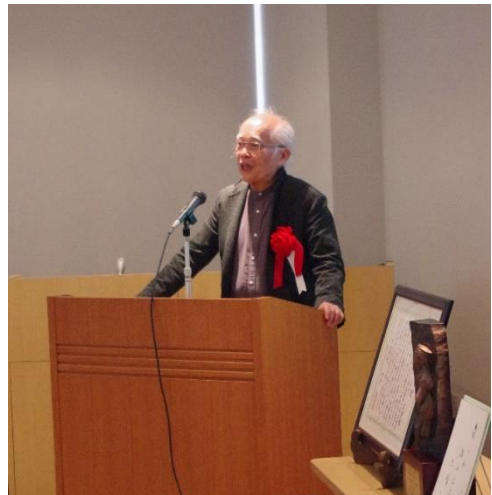
候補者の内訳は、40歳代から80歳代におよび、研究歴や所属機関は多彩で、「受賞の対象となる研究及び活動の業績」についても、宮坂英弑が目指した縄文時代のすぐれた研究と活動を示すものであった。このことは、本賞が広く学界等一般に周知された結果をよく示すものである。

こうしたすぐれた候補者を得て、選考委員会において慎重な審議を行い、第25回尖石縄文文化賞の受賞者として、小川忠博氏（東京都）を全会一致で推薦することに決定した。

同氏は、縄文土器の周囲をカメラが回転する展開写真の技法を開発し、全国延べ2,000カ所以上を巡り10,000点を超える縄文土器を撮影した。その展開写真は『縄文土器大観』全4巻（小学館）に掲載され、同書を通じて縄文土器の研究者に広く共有されるところとなり、複雑で立体的な縄文土器の文様構造研究の進展に大きく貢献してきた。また、そうした展開写真だけでなく、遺跡やストーンサークルなどの遺構、土偶や土器をさまざまな角度から撮影し、縄文文化の魅力を学界はもとより世間一般の方にもしっかり伝えてきた。また、尖石遺跡から出土した遺物を数多く含む写真集『縄文美術館』（平凡社）や『土偶美術館』（平凡社）、そして各地の博物館や美術館における写真展が、同氏によってこそ初めて実現できた重要な普及活動の実際を物語るものとして記憶されていくに違いない。

こうした氏の業績は、研究者とは異なる切り口で縄文文化及び縄文芸術の魅力を広く一般に伝えるものとして高く評価でき、尖石遺跡の調査や竪穴住居の復元、尖石考古館の建設を通じて、縄文文化の解明だけでなく、その魅力を広め、文化遺産として継承していこうと取り組んだ宮坂英弑の業績を顕彰する宮坂英弑記念尖石縄文文化賞の趣旨に沿うものであり、まことにふさわしい受賞者である。

令和6年（2024年）8月31日  
宮坂英弑記念尖石縄文文化賞選考委員会  
委員長 小林 達雄



第25回受賞者 小川忠博氏